

小学校 社会

思考力・判断力・表現力等を育む社会科学習の在り方  
ー地域教材の活用と言語活動の工夫を通してー

義務教育課 研究員 江 渡 勇

要 旨

地域の人々の安全を守るための諸活動として、おいらせ町の火災の予防や対処について教材化を図ったことで、児童に問題意識をもたせることができた。また、アウトラインシステムを取り入れた「資料読み取り」「問題解決」の2種類のワークシートを活用し、調べて分かった事実を比較・関連付け・総合させやすくしたり、ワークシートを活用した相互交流を行ったりしたことにより、思考の広がりや深まりが見られた。

キーワード：小学校 社会科 思考力・判断力・表現力等 地域教材の活用 ワークシート

I 主題設定の理由

思考力・判断力・表現力等は、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（2008）で、学力の重要な要素の一つとして示されており、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な能力として、育むことが求められている。さらに小学校社会科においては、「学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して観察・調査したり、各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習」が大切であるとしている。

一方、地域の素材を教材化することにより、児童の主體的で五感を使った体験的な学習が期待できる。そして、身近で具体的な場面を通して、思考・判断・表現といった学習活動を展開することが可能である。このことから、地域素材を教材化し活用することは、思考力・判断力・表現力等の育成にも有効ではないかと考え、本研究の主題を設定した。

II 研究目標

第4学年、地域の人々の安全を守るための諸活動の学習において、身近な地域素材の教材化とともに、アウトラインシステムを取り入れた「資料読み取り」「問題解決」の2種類のワークシートを活用すること、及びワークシートを活用した相互交流を行うことが、思考力・判断力・表現力等を育むことに有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

社会科の学習において、次のような実践をすることで、思考力・判断力・表現力等が育まれるであろう。

- ・児童に興味・関心をもたせることができるような身近な地域素材を教材化する。
- ・資料から取り出した事実を比較・関連付けて問題を見いだせるように、アウトラインシステムを取り入れた「資料読み取りワークシート」を活用する。
- ・調査・見学によって得た事実を比較・関連付け・総合しながら再構成することができるように、アウトラインシステムを取り入れた「問題解決ワークシート」を活用する。
- ・自分や全体の考えを広げたり深めたりすることができるように、ワークシートを活用した相互交流の場を設ける。

## IV 研究の実際とその考察

### 1 研究の内容

#### (1) 主題について

社会科で思考力・判断力・表現力等を育むためには、社会科で育むべき思考力・判断力・表現力等とは何かを明確にする必要がある。ここでは「社会的な思考・判断・表現」という評価の観点の内容を理解することで、社会科で育む思考力・判断力・表現力等を明らかにしていく。「社会的な思考・判断・表現」の観点について、澤井陽介（2010）が述べていることをまとめると、社会科で育む思考力とは、学習問題を見いだしたり、社会的事象の特色や関連や意味などについて広い視野から考えたりする力、社会科で育む判断力とは、社会的事象について公正に判断する力、社会科で育む表現力とは、社会的に思考・判断したことを説明、論述、討論などの活動により話したり書いたりする力、と捉えることができる。

このような力を児童に身に付けさせるためには、「小学校学習指導要領解説 社会編」（文部科学省、2008）にあるように、社会的事象を比較・関連付け・総合しながら再構成するとともに、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うなどの学習が必要である。これを、第3学年及び第4学年の学習内容にあてはめて整理したものが図1である。

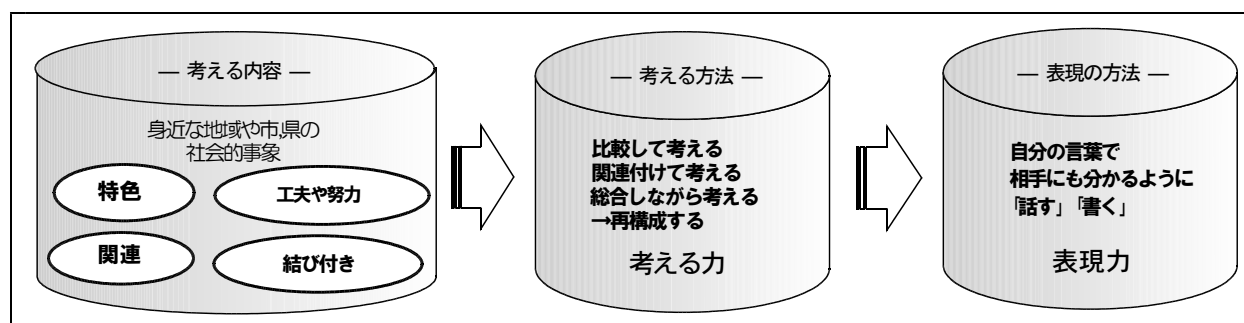


図1 第3学年及び第4学年の社会科で育む「思考力・判断力・表現力等」の学習

では、社会的事象を比較・関連付け・総合しながら考え再構成するとはどういうことか。これまでの筆者の学習指導等を基に、以下のように整理した。

#### ○比較して（比べて）考えるとは

- ・一見似ているもの同士を比較することで、違いを見いだして、社会的事象の特色を理解すること。
- ・一見違うと思われるものを比較することにより、似ているところを見いだして、社会的事象の特色を理解すること。

#### ○関連付けて（つなげて）考えるとは

- ・一見何の関わりも無い事柄を関わらせて見ていくことで、社会的事象のもつ意味を理解すること。
- ・幾つかの事柄を関わらせて見ていくことで、矛盾する点を見いだし疑問をもつことができること。

#### ○総合して（まとめて）考えるとは

- ・幾つかの事柄をまとめて見ていくことで、それらのもつ社会的事象の新たな意味を理解すること。

#### ○再構成するとは

- ・比較・関連付け・総合する中で、社会的事象に対する認識が広がったり、深まったりしていくこと。

本研究においては、以上のように、学習内容について比較・関連付け・総合しながら再構成したことを自分の言葉で分かりやすく伝えている姿を捉えていく。このことをもって、思考力・判断力・表現力等が育まれた姿としていきたい。

#### (2) 仮説について

##### ア 身近な地域教材の活用

身近な地域素材を教材化し活用することで、児童の興味・関心が高まり、意欲的な学習活動や、観察や調査見学など五感を使った体験的な活動ができると考える。また、生活体験や既習事項を生かした思考・判断・表現の場面を設定しやすいといった利点があると考えられる。

実際の授業では、地域教材の有効性を生かせる素材として、おいらせ町の木ノ下小学校区における火災の予防や火災への対処についての取組を教材化した。身近なこととして問題意識をもって学習を進めたいと考えた。

イ 思考力・判断力・表現力等を育むためのアウトラインシステムを取り入れたワークシートの工夫

アウトラインシステムとは、学習の流れを短い文で示しておくシステムであり、「社会科『資料読み取り』トレーニングシート（村野聡，2010）」を参考にした。

○単元に対して問題意識をもたせるための「資料読み取りワークシート」の活用（図2）

「資料読み取りワークシート」については、アウトラインシステムによって、観点に沿って順序よく資料を読み取ることができるようにした。さらに読み取った事実の意味や相互の関連について記述させる欄を設けた。

実際の授業では、木ノ下小学校区の特徴についての問題意識を児童にもたせたいと考え、1時間目に活用した。

○比較・関連付け・総合を促すために学習内容が1枚にまとめられている「問題解決ワークシート」の活用（図3）

「問題解決ワークシート」については、アウトラインシステムによって学習過程が見えやすくなるようにした。そのことにより、考え、まとめる段階で事実と事実を比較したり、関係を考えたりすることが容易になると考えた。

実際の授業では、「火事の予防ワークシート①」「火事の予防ワークシート②」「消防署のひみつワークシート」「火事からくらしを守るまとめワークシート」の計4枚の「問題解決ワークシート」と、消火に際して消防署と関係機関の連携を他の事例におきかえて予想させる「考えてみようワークシート」、学んだことを生かしながら自分たちができることを考える「自分たちができることワークシート」の合計6枚を活用した。

ウ ワークシートを活用した相互交流

相手との意見交換の中で自分の考えを確認したり、必要だと思う相手の考えを自分の考えに取り入れたりしていくことで、自分の考えに自信と広がりをもたせることをねらいとした。図4のように少人数（3・4人）から各班（6・7人）とスモールステップで相互交流を行い、必要に応じてクラス全体でも行った。相互交流を効果的に機能させる手だてとして、自分の考えを書いてあるワークシートを相手に示しながら説明させた。そうすることで相手に内容がより伝わりやすくなると考えたからである。

そして「消防署のひみつワークシート」以外の5枚のワークシートを活用して相互交流を行った。



図2 資料読み取りワークシート

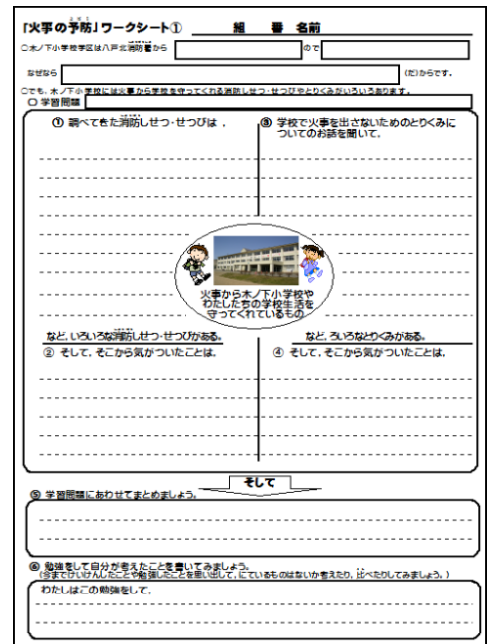


図3 問題解決ワークシートの例

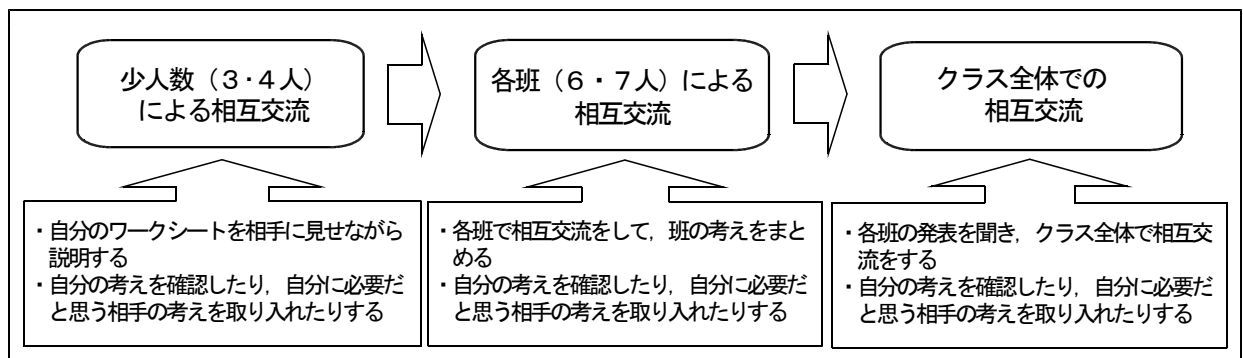


図4 相互交流の形態と流れ

## 2 検証授業について

研究の内容を基にして検証授業を行った。実施期間は、平成23年6月8日～6月21日で、対象は、おいらせ町立木ノ下小学校第4学年 116名（3クラス）である。小単元の構成は、図5のとおりである。仮説の検証については、学習前後での児童の意識調査、ワークシートのまとめの記述内容の分析及び相互交流の内容の分析によって行った。

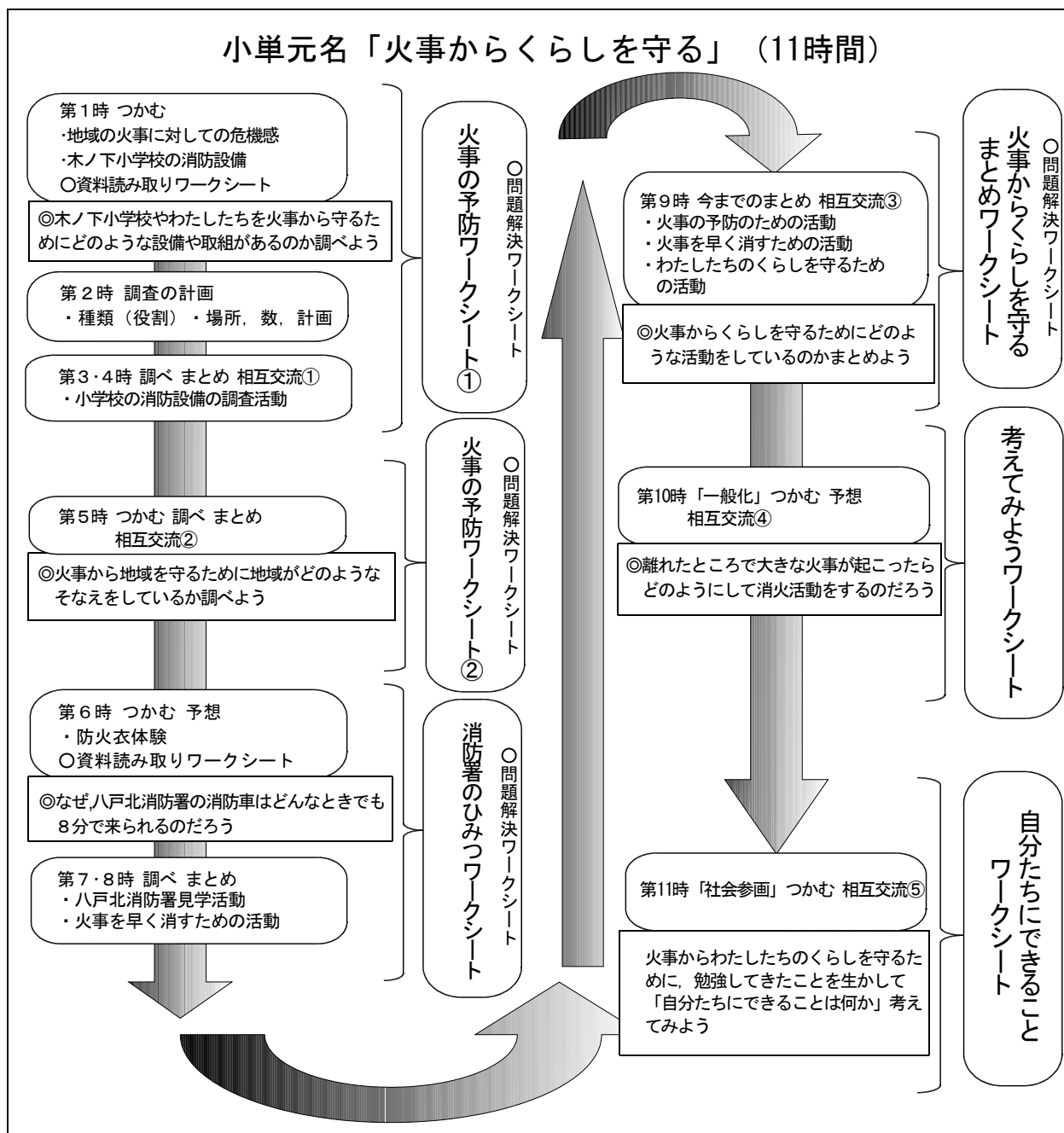


図5 小単元「火事からくらしを守る」の授業の流れ

## 3 授業後の検証

### (1) 児童の身近な地域の学習についての意識調査より

小単元の学習の前後に、地域の学習に対する意識調査を行った。対象は、検証授業を行った木ノ下小学校第4学年 116名である。設問は、問1「自分の住んでいる地域の勉強は好きですか」、問2「インタビュー活動は好きですか」で、それぞれ、身近な地域の学習に対する意識の変化と調べ活動に対する意識の変化を見るために行ったものである。選択肢は「好き」から「嫌い」までの4段階とした。

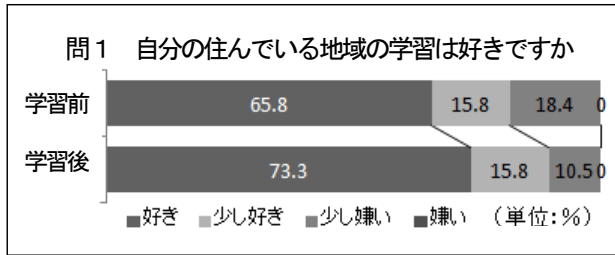


図6 学習前後での意識調査の結果①

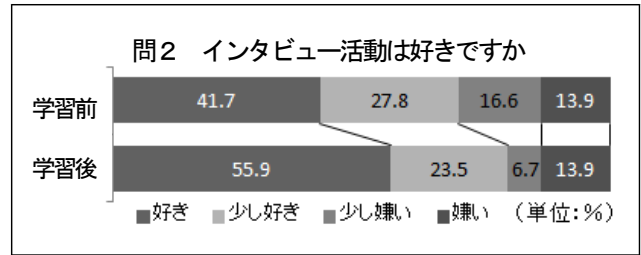


図7 学習前後での意識調査の結果②

図6にあるように、地域の学習については学習前から「好き」と回答している児童が多いが、学習後は7.5ポイント増えている。それに伴い「少し嫌い」の回答が7.9ポイント減少している。「少し嫌い」から「好き」に変化した児童の理由には、「見学やみんなで話し合うところ」や「動いたり、聞きに行ったりすることが楽しい」のようなものが見られた。

図7にあるように、問2では「インタビュー活動が好きになった」という児童が増えた。問2については理由を記述させなかったが、児童の社会科が好きな理由の中に、「いろいろ調べたり、聞いたりできるから」や「消防士の人たちに質問をして答えてくれたのがうれしかったから」などの記述が見られた。

また、ワークシートの感想にも、学校や地域の調査活動や見学などの五感を使った体験的な活動に対するものや、身近な自分の生活と関連付けたものが単元を通して見られ、身近な地域素材を教材化した体験的な学習が、児童の興味・関心をもたせるために有効だったと考える。

## (2) ワークシートのまとめの欄に書かれた記述の分析より

学習で用いた、4枚の問題解決ワークシート及び発展学習のワークシートのまとめの記述の分析を行った。アウトラインシステムによって分類して書かれた幾つかの学習内容を、比較・関連付け・総合しながら、学習問題に合わせてまとめを書いているかという視点から分析した。本来、比較して再構成している姿、関連付けして再構成している姿、総合して再構成している姿を個別に見ていきたいのだが、児童の記述には厳密に分類できないものも多かったため、複数の学習内容を、比べたり、関わらせたり、まとめたりしながらまとめを書いている場合は、比較・関連付け・総合していると捉えた。

### ア 「問題解決ワークシート」のまとめの記述の分析

「火事の予防ワークシート①」では、校内にある様々な消防設備の数と設置場所を関連付けたり、火災の予防のために行っている取組と消防設備を総合したりすることで、わたしたちの学校生活は、様々な設備や取組によって火災から守られていることを捉えさせたいと考えた。

まとめの記述を見ると、木ノ下小学校の火災の予防のための取組について、下記のように校内の消防設備の数と設置場所を関連付けたり総合したりできている児童は全体の94.8%であった。

児童の記述：木ノ下小学校やわたしたちの学校生活は、いろいろな消防せつ・せつびが場所に合わせてたくさんあり、それらで火事から守られている。そして、学校では教頭先生が先生方に係をぶんとんさせてわたしたちをきけんから守っている。

「火事の予防ワークシート②」では、地域の消防施設・設備の場所や数を比較して関連付けたり、火災の予防について地域の人々や様々な関係機関が行っている取組を総合したりすることで、火災の予防のために消防署を中心として地域の人々が協力して活動していることを捉えさせたいと考えた。

まとめの記述を見ると、消防署を中心とした地域の火災の予防の取組について、下記のように地域の消防設備の数と設置場所を比較・関連付けたり総合したりできている児童は全体の92.1%であった。

児童の記述：火事を起こさないために、消防しょを中心にみんなで協力していることがわかりました。そして、地いきにはたくさんの消防せつびがバランスよく置かれていることがわかりました。

「消防署のひみつワークシート」では、24時間体制で働いていたり、制服のまま寝たりしているという八戸北消防署の人たちのたくさんの取組を総合して、8分で来られる事実と関連付けることで、八戸北消防署の人たちは、木ノ下小学校にどんなときでも8分で来られるようにたくさんの工夫や努力をしていることを捉えさせたいと考えた。

まとめの記述を見ると、八戸北消防署の取組について、下記のように取組と時間を総合して関連付けることのできている児童は全体の95.4%であった。

児童の記述：消防士さんは、たくさんのくんれんやじゅんぴをしているから木ノ下小学校に8分で来ることができる。

「火事からくらしを守るまとめワークシート」の前半では、消防署と関係機関の取組を総合したり関連付けたりすることで、迅速な消火活動のために消防署が中心となり関係機関と連携して消火活動を行っていることを捉えさせたいと考えた。

「火事からくらしを守るまとめワークシート」の前半のまとめの記述を見ると、消防署を中心とした火災への対処の仕方について、下記のように消防署と関係機関の取組を、総合したり関連付けたりできている児童は全体の89.3%であった。

児童の記述：消防署が中心になって、消防団や関係きかんとれんけいして早く火を消す工夫をしているのがすごいと思いました。

「火事からくらしを守るまとめワークシート」の後半では、火災からくらしを守るために、火災の予防や火災への対処の仕方を比較したり関連付けたり総合したりすることで、わたしたちの安全なくらしは、消防署が関係機関や地域の人々と協力して、工夫や努力をすることで守られているということを捉えさせたいと考えた。

「火事からくらしを守るまとめワークシート」の後半のまとめの記述を見ると、火災からくらしを守るための取組について、下記のように消防署と関係機関、地域の人々の取組を比較したり関連付けたり総合したりできている児童は全体の81.1%であった。

児童の記述：消防しょやいろいろなきかん、みんなが協力してわたしたちのくらしを守っている。チームワークが大切です。

これら4枚のまとめの記述からも分かるように、アウトラインシステムを取り入れたワークシートによって、それぞれの学習内容を構造的に捉えさせ、順を追って書かせたことが、調査・見学などによって得た事実を比較・関連付け・総合することに有効だったと考える。

#### イ 第10・11時におけるワークシートのまとめの記述の分析

また、単元の最後に行った二つの発展学習に対応したワークシートのまとめの分析も行った。この2時間は、生活経験やこれまで単元で学習したことを基に、新たな課題について考える時間である。活用したワークシートはアウトラインシステムによらないため、比較・関連付け・総合する内容は生活経験や学習したことを基に、自分で考えることが必要となる。2枚のワークシートのまとめの記述を分析することで、アウトラインシステムを取り入れたワークシートの学習の効果を明らかにできると考えた。

第10時「考えてみようワークシート」では、より大規模な火災が発生したと仮定し、その際の消防署等の役割を「消防署のひみつワークシート」での学習と比較することにより、その違いや共通点を見いださせた。そして、大きな火災の場合、消防署を中心として行われる消火活動は、他の市町村の関係機関とも連携するという捉えさせたいと考えた。

まとめの記述を見ると、下記のように大規模な火災の場合の消防署と関係機関の連携を比較したり関連付けたりしながら、再構成できている児童は全体の76.3%であった。

生活経験や「消防署のひみつワークシート」での学習を生かし、消防署からおいらせ町や近隣市町村までの距離を比較したり、消防署と関係機関の役割を関連付けたりしながら、消火活動に際しての各機関の役割や連携についての認識を再構成することができたと考える。

児童の記述：大きな火事があったときは、ほかの市町村の消防署と協力する。そして、自えいたいも協力してくれる。

第11時「自分たちにできることワークシート」では、火災の予防の学習をまとめて、自分の生活と関連付けて考えることにより、火災の予防のために自分たちにできることを具体的に捉えさせたいと考えた。

まとめの記述を見ると、下記のように火災の予防について、自分の生活経験や学習してきたことを関連付けたり総合したりしながら、火災の予防に対する自分の取組について再構成できている児童は全体の80.5%であった。

生活経験や「問題解決ワークシート」での学習を生かし、自宅の現状と関連付けたり学習してきた内容を総合したりしながら、火災の予防に対する自分の取組について再構成することができたと考える。

児童の記述：自分たちにできることは、ポスターでよびかけたり、けいほうきを付けてもらうなどたくさんある。日ごろから普通のことはしっかりやらなければいけない。

このように、学習してきたことを活用し、社会的事象を比較・関連付け・総合しながら再構成する活動を単元の中で又は単元ごとに繰り返し行っていくことが思考力・判断力・表現力等を育むことにつながっていくと考える。

### (3) 相互交流の内容の分析

相互交流の中で自分の考えを広げたり深めたりするためには、相手の考えを効果的に取り入れていくことが必要である。本研究では、相互交流が効果的になされているかどうかを検証するための一つの手だてとして、ワークシートのまとめの記述に交流相手の考えを取り入れた際、下線を引かせて自分で書いたものと区別させるようにした。相互交流を行わなかった「消防署のひみつワークシート」以外の5枚のワークシートごとに、まとめの記述に下線を引いている児童の割合を示したのが表1である。

表1 相手の考えを取り入れた児童の割合の変化

火事の予防ワークシート①	10%
火事の予防ワークシート②	12%
火事から暮らしを守るまとめワークシート	20%
考えてみようワークシート	44%
自分たちにできることワークシート	50%

これを見ると、交流相手の考えを取り入れた児童が、次第に増えてきていることが分かる。スモールステップにより、相互交流の回数を重ねることで、活動に慣れてきたことなどが要因として考えられる。交流の質という点では、当初はお互いのまとめを述べ合うだけだったものが、次第に相手の考えを聞くことで自分の考えに自信をもてたり、相手の考えを聞くことで新たな発見をしたりするという姿が見られるようになった。また、「話し合うってすごく大切なんだな」という感想を書く児童も出てきた。このようなことから、ワークシートを活用した相互交流の効果があったと考える。

次に、クラス全体での相互交流が効果的に働いた場面について述べる。火災からわたしたちの暮らしを守るために、学習してきたことを生かして「火事を防ぐために自分たちにできることは何か」を考える単元最後の時間である。相互交流は少人数、班、クラス全体と進み、終盤の場面である。以下は、その時の記録である。

A児	ほとんどの班で出ている、「火遊びをしない」や、「花火の時は水を準備する」なんて <u>普通のことじゃないですか</u>
B児	<u>その、普通のこと</u> ができないから火事になるんでしょ
A児	普通って・・・
C児	僕も花火の時は必ず水を準備しているよ
先生	みんな、 <u>普通のこと</u> をするって簡単、難しいどっち（児童はざわめく）
先生	じゃあ、忘れ物をしないのは <u>普通のこと</u> 特別なこと
全員	<u>普通のこと</u>
先生	そしたら、忘れ物をしたことの無い人は手を挙げて（ <u>誰一人手は挙がらない</u> ）
先生	じゃあ、忘れ物をしたことのある人（ <u>全員の手が挙がる</u> ）
先生	そうだよね、 <u>普通のこと</u> をするって、決して簡単ではないんだよね
D児	<u>そっかあ。だからポスターなんかで火遊びをしないように呼びかけることが必要なんだ</u>
E児	<u>だから、みんなで協力していろいろな取組をすることが必要なんだね</u>

A児は「火遊びをしない」や「花火の時は水を準備する」という意見をほとんどの班が出していることに対し「何でそんな当たり前のことをわざわざ発表するんだろう」という疑問をもった。そのA児の疑問に対するB児の発言をきっかけにして、当たり前のことをしたり呼びかけたりすることの大切さ、つまり社会参画の意義についてクラス全体で再認識できた。単元の最後に生活経験や学習してきたことを生かして自分にできることを考え相互交流を行ったことにより、自分の行動と関わらせたり、他の考えと比べたりして「火事から暮らしを守る」ための取組についての認識を再構成できたのではないかと考える。

## V 研究のまとめ

### ○身近な地域素材の教材化について

おいらせ町の木ノ下小学校区における火災の予防や火災の対処について、木ノ下小学校区の地域の特色を読み取らせることができた。これが問題追究への強い動機付けになり、単元の学習に対して関心や

意欲をもたせることができた。

○「資料読み取りワークシート」の活用について

アウトラインシステムを取り入れ学習内容の関連について捉えやすくしたことにより、八戸北消防署からの距離について、おいらせ町の他の学校と木ノ下小学校とを比較させたり、距離と時間の関連を考えさせたりして、問題を見いださせることができた。

○「問題解決ワークシート」の活用について

アウトラインシステムを取り入れて学習過程を見えやすくし、学習内容を1枚のワークシートに構造化したことにより、調査・見学をしたり資料から調べたりして得た事実を比較・関連付け・総合する中で、学習内容に対する認識を広げたり深めたりすることができた。

○相互交流について

当初はお互いのまとめを述べ合うだけだったものが、次第に、相手の考えを聞くことで自分の考えに自信をもてたり、新たな発見をしたりする姿が見られた。また、クラス全体での相互交流の場面では、より考えを広げたり深めたりした場面が見られるなど、相互交流の効果があったと考える。相互交流を単元の中で繰り返し行っていくこと、またはもっと長いスパンで継続的に行っていくことで、その効果はより大きくなると考える。

## VI 本研究における課題

○身近な地域素材を教材化した体験的な学習について

本研究では、調査・見学などの活動を通して、身近な地域の社会的事象を実感を伴って捉えさせることができた。しかし、すべての地域教材において、社会的事象を直接体験によって捉えさせることは難しい。今後は、ロールプレイやシミュレーションなどの要素を取り入れた授業も考えていきたい。

○「資料読み取りワークシート」の活用について

普通の授業で使用する様々な資料にはアウトラインシステムを取り入れたものがなく、アウトラインシステムに頼らずに目的に応じて資料を速く正確に読み取っていかなければならない。資料を正確に読み取る力を育成していくためにも、アウトラインシステムで読み取った経験を活用させていく活動や、学習のねらいや児童の実態に合わせて資料の読み取らせ方を工夫していくことが大切であると考えられる。

○「問題解決ワークシートの」の活用について

「問題解決ワークシート」はノートと異なり、記入する内容が指示され学習過程も見えやすく構成されている。中位から下位の児童には使いやすかったようだが、上位の児童には多少堅苦しく感じたようだ。ワークシートを効果的に活用するためにも、ノートとワークシート、それぞれの特徴を理解した上で、単元の内容やねらいによって使い分けていく必要がある。

○相互交流について

児童は、ワークシートを交流相手に示しながら説明するという活動が初めてであり、慣れるまでには時間がかかった。このような形の相互交流に早く慣れ、自分や全体の考えを広げたり深めたりするためには、児童間の良好な人間関係の構築や目標のめやすの工夫など、様々な手だてが必要であると考えられる。引き続き研究を進めていきたい。

### <参考文献>

文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編（平成20年7月）』

澤井陽介 2010 「社会科における「思考・判断・表現」とその評価（小学校）」『指導と評価 2010年11月号』（通巻671号）日本図書文化協会日本教育評価研究会

中央教育審議会 2008 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』

村野 聡 2009 『社会科「資料読み取り」トレーニングシート』 明治図書

小学校社会科副読本 『わたしたちのふるさと おいらせ町』 おいらせ町教育委員会

長谷川康男 2008 『小学校社会科 授業づくりと基礎スキル』 東洋館出版社